

『広幢集』考

猪苗代家の源流を求めて

酒井茂幸

A Study of the Kodoshu : In Search of the Origins of the Inawashiro Family

はじめに

- ①『広幢集』の成立
- ②『広幢集』に見る広幢の交際圏と出自
- ③広幢の和歌と生活
おわりに

【論文要旨】

国立歴史民俗博物館蔵田中稔氏旧蔵『広幢集』（以下『広幢集』と略称）は、稿者により近時全文翻刻が公表された新出資料である。その資料的価値は、従来未詳であった、広幢の晩年の伝記的事蹟が明らかになるとともに、『広幢集』に記載のある兼載・心敬・顕天・用林・顕材・岩城由隆・兼純との交流関係や相互の人的ネットワークが新たに判明するところに存する。

本稿では、まず、これら六人の人物について『広幢集』の和歌の解釈をもとに、従来知られていた史（資）料と照合し、広幢を取り巻く地域社会の政治的・宗教的思潮の一端を叙述し、広幢を岩城の禪長寺出身の数寄の隠遁者と推定した。また、兼純の項において、岩城に拠点を置き、京都との往復によりその道の第一人者へ師事し、岩城氏ら在地の国人領主や戦国大名の扶助を受ける行動様式を、同時代の宗長・宗牧との差異性から指摘し、同様な行動様式が、兼純から長珊へと受け継がれていることを

論述した。

『広幢集』の特色に道歌や哀傷歌・追善歌等が多いことが挙げられるが、これは集中にも記される母の死を契機とした事象で、最晩年に至って広幢は禅僧への回帰を余儀なくされたのである。

連歌師の家としての猪苗代家の源流は、広幢であり、その和歌・連歌の世界における活躍は、『広幢集』に描かれるとおりである。しかし、兼載が堯恵から古今伝授を受けており、兼純に『古今集』の講釈をする資格があったのに対して、広幢は誰からも古今伝授を受けていなかったため、兼純に古今伝授ができず、和歌の家、猪苗代家の創始者とはなり得なかった。古今伝授の師資相承に広幢の名が見えず、猪苗代家の系図からも広幢の名が消えていった。兼純が広幢から受け継ぎ、長珊に伝えた連歌師の一行動様式を掘り起こしたのが本稿である。

はじめに

室町中期の連歌師・歌人の広幢の曾孫、兼如は、『滑稽太平記』において、

洛陽に上洛のとき、奥州詞のだみ声にて、一句を吟出されければ、元より生国紛ねども、世人、岩城兼如と名字のやうに云けり、落書に

奥州の岩城兼如に誘われてををくの人の迷ひこそすれと有りけるを見て、兼如は「誘われで」と文字に濁をうって返歌仕たりと也

と描かれている⁽¹⁾。類似した記載は、名古屋大学付属図書館皇学館文庫蔵『兼与法橋直唯聞書』にも見出され、多少の誇張や嘲笑を含んでいるとしても、かなり事実に近い逸話であろう。では、なぜ、京都において岩城の「田舎詞」(前掲『兼与法橋直唯聞書』)で連歌を詠む者が現れたのであろうか。また、こうした現象はいつ頃から始まったのであろうか。

元来、猪苗代兼載・兼純は、会津の猪苗代氏を称しているが、岩城(現福島県いわき市、以下「岩城」)乃至は「磐城平」の呼称に統一⁽²⁾に地縁・血縁が深かった。兼載は、猪苗代盛実の子で、出身が会津とされる(『翰林胡蘆集』巻七、『耕閑雜記』、『伊達家世臣家譜』)が、晩年の会津帰郷前の文亀二年(一五〇二)まで、岩城に立ち寄り一年半程滞在している⁽³⁾。また、従兄弟とされる兼純は、三條西実隆の家集『再昌草』に「兼純張行、宗碩草庵連歌……兼純近日下国云々、奥州岩城の者也」とあるように、岩城の生まれであった⁽³⁾。

ところが、近時、兼載叔父・兼純父(顕伝明名録)等。後掲)とされ

る広幢のまとまった家集である『広幢集』が、国立歴史民俗博物館蔵の「田中稜氏旧蔵典籍古文書」中に伝存することが確認され、全文翻刻が成された⁽⁴⁾。この田中本『広幢集』(以下『広幢集』と略称)によれば、広幢は岩城出身の連歌師・歌人であり、集中には、岩城や関東における和歌の実作の実態が克明に描かれていた。そもそも、広幢の連歌師としての活動は、天理大学付属天理図書館蔵『広幢句集』三卷(以下「天理本『広幢句集』」と略称⁽⁵⁾) (文化六年(一八〇九)の滋岡長滋による転写本が大坂天満宮御文庫に存する。詳細は後述)により夙に知られ、行助・宗祇・兼載から批点を受けていることから、相当な力量を有する連歌師であったと思われる。だが、資料に恵まれず、その出自や足跡については未詳な点が多かった。よって、『広幢集』を探究することにより、広幢の伝記的事項が解明されるのみならず、猪苗代家の室町中期の複雑な家系や師承関係をより明確に叙述できよう。とりわけ、兼載との交流関係の究明や兼載との資質の差異性の抽出が課題となる。また、兼載・兼純の道統は、「兼載・兼純―長柵―宗悦―幽齋―兼如―(信尋)―兼与(以下略)」(京都大学付属図書館谷村文庫蔵『猪苗代家代々伝授控』に拠る⁽⁶⁾)と続くが、こうした血脈や系譜の類の位置付けも、再検討を要する。

本稿では、第一に、『広幢集』の出現により新たに判明した広幢の伝記的事項を指摘した上で、広幢を取り巻く連歌師や武士のネットワーク、及び彼らの活動を支えた、地域社会の政治的・宗教的思潮の一端を明らかにする。第二に、これら猪苗代家の源流に関する新見をもとに、猪苗代家の師資相承の実相を明らかにすることを試みる。

①『広幢集』の成立

書誌解題は前稿にやや仔細に述べたので、本稿では、前稿における問題点の再確認に留め、『広幢集』の成立や内容に言及していこう。

まず、書名を「広幢集」と認定することは、表紙自体が後補の改装であり、「百二代後土御門院」が後人による書き入れであることを根拠とする。次に、稿者は『広幢集』を兼純自筆ではなく、その転写本と考えているが（前掲注〔4〕『田中教忠蔵書目録』は「永正十八年義純寫」とする）、兼純の真蹟とされる天理大学付属天理図書館綿屋文庫蔵『兼載独吟千句上（下）』の筆と比較すると、明らかに筆蹟が異なり、『広幢集』の紙質も永正一八年（一五二二）を下ると判断される。

さて、本書は、後掲跋文により、息兼純が父広幢の詠草類を整理・編纂した家集と判断でき、総歌数四五七首（内、他人詠四首（兼載二首、心敬一首、兼純一首）を含む）を所収する。

家集全体の構成は、まず前半（二五三番歌まで）が題詠歌で、冒頭三一首のみは四季・恋・雑の部類があるが、それ以外は雑纂である。後半（二五四番歌以降）から贈答歌や独詠等が配列され、独詠の中には哀傷歌や述懐歌が多い。以後『蒙求』の「孝行の段」の章段名を歌題とした題詠九首、『道歌』四五首が連なり、道号・取名を題とした「自賛」四首、『道歌』四首が続き、『老子経』四首を踏まえた詠が巻末である。『広幢集』が部類や日次等により整理されて編纂されなかった理由は、編者の兼純の跋文に明らかである。それを掲出しよう。

右此草案は、亡父あるは書きすてあるはむすびあはせなどをかかれたる反胡^{（反）}どもを見侍る中に、年ごろすさみをかれし哥共、文のうらなどにあからさまにしるしつけ給ひたるを、籠居のつれづれにかたはしづつ次第をもわかつたず少々うつし侍ぬ、連哥の心ざしは往昔より心教僧都・専順法眼をはじめもろもろの好士にたづさはり給ひて老の波にしづめる比までも打すてられず、と見給へしに、哥の道にもいたりふかく、法のことのはあさからぬことよりはりまでさとり知給ひけん、事かしくもはづかしくも侍らずや、存日に尋いだしてかく

しるしをき侍らば、よろこびのまゆをもひらき、行はんずるにこそといよいよ墨の袖をしほり、筆の海みぎはまさり侍るのみ、併他人の披見などに入べきためにあらず、ただなき跡の形見に身にそへ侍らんがため也

り

（二行分空白）

于時永正十八年十月十七日 桑門兼純

冒頭の記載によれば、本書は、「亡父」広幢が書き捨てたままであったり、綴じ紐などで束ねたままであった反故紙の中から、長年詠み継いであった和歌を、順序も顧慮せず、片端から写したものであるという。連歌を心教（敬）僧都・専順法眼に師事して修めたというのは、少なくとも、心敬との関係は、『広幢集』の本文中から傍証され、亡父の功績に対する賛辞を割り引いても事実であろう。また、後半に「…哥の道にもいたりふかく、法のことのはあさからぬことよりはりまでさとり知給ひけん」とあるのも、家集本文から知られる、和歌を多作し、禪籍に広く通じていた広幢の資質を的確に言い当てている。

次節では、『広幢集』から新たに判明する、広幢の出自や行動圏を探究してみよう。

②『広幢集』に見る広幢の交際圏と出自

前述のように、従来、広幢研究の基礎資料とされてきたのは、前掲の天理本『広幢句集』である。また、広幢の出自を叙述する上で援用されてきたのは、次に掲げる二種の史料の記載であった。

広幢^(マ) 兼載 叔父 徹書記弟子 (大阪天満宮御文庫蔵『連歌百事雑記』)

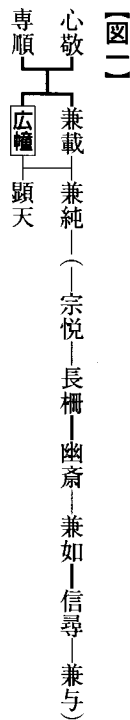
広幢^(マ) 連歌師 一説兼載叔父 (東京大学史料編纂所蔵『顕伝明名録』)

いずれも広幢を兼載の叔父としているが、生没年や事蹟などには一切触れていない。ところが、『広幢集』には、兼載の名が複数見え、その交流の深さが知られる。そこで、『広幢集』に記載のある同時代人名を一覧にしてみよう。

【表一】(「母」「友だち」等の普通名詞は除く。人名の下のローマ数字が登場回数)

I 兼載(法橋) 5 II 心教「敬」僧都 4 III 顕天 1 IV 平(岩城)由隆 1 V 顕材 1 VI 専順 1 (跋) VII 兼純 1 (跋)

また、【表一】に掲げた人物の血縁・師承関係を、【図一】に広幢を中心に整理しておく(師弟関係を「―」、血縁関係を「|」で明示した。参考までに兼純以下兼与までの猪苗代家の血脈と師資相承を括弧内に記した)。



これから、【表一】掲出の人物の内、和歌本文に名の見えない「専順」以外について、やや仔細に考証し、相互の人的ネットワークを押えることにより、帰納的に広幢の事蹟を論述し、出自を推定していきたい。

I 兼載と広幢

兼載との贈答歌でまず注目されるのは(歌番号は前稿に依る)、次の二五五―二五八番歌である。

兼載法橋に連哥の一卷をみせ侍て、合点など所望せしついでに
ななそぢにちかのうらはのもくづのみかく塩がまのあまよいつまで
しれや君あしたづ道のことほりにまかせてたのむ老の衣を

返し 兼載

色々ののはなのちぐさにをく露のふかさあさをわきぞかねつる
よしあしもしらぬ難波のうら人にすみつく事を何憑らん

兼載の返歌の「よしあしも」の詠が、天理本『広幢句集』の転写本である、大阪天満宮本の跋に、

よしあしもしらぬ難波のうら人にすみつくる事をな^(マ)にたのむらん

一笑々々／兼載(花押)

此一卷者法橋兼載合点刺加佳什一篇尤可握翫者歟

と見える。大阪天満宮本の親本とされる天理本『広幢句集』は、兼載の歌の部分のみ切り取られている。なお、当該箇所は、「愚墨十五句／芳作毎句優艶候」の直後である。贈答の年次は、兼載が前号宗春を兼載に改めるのが、文明一八年(一四八六)末であり、それ以降の所作である。ただ、金子金治郎は大河内哲太郎蔵「兼載書状」に、天理本『広幢句集』の兼載点に触れるところがあり、明応七年(一四九八)と比定する⁽⁸⁾。「兼載書状」の全文を掲出しよう。

遠界之芳信、寔成拜顔之思候、祝着此事候、抑御一卷披見申候、每句殊勝勿論候、付墨事承候、斟酌候上、近年余自都鄙方々承候間、不堪之氣力、難堪之事情、而從今春停止 御製合点さへ堅返上候、好雖然以旧友之、自遠國承候間、是計任芳慮候、巨細慶祐可令申候歟、存命之中今一度面談申度候、此便風俄之様候間、先芳札一筆申候、細々好便之時に可申承候事本懐候、恐々敬白

六月十一日 兼載（花押）

広幢禪師 尊報

この書状には、広幢禪師から、その連歌一卷に加点を依頼されたことへの返書が記され、兼載が連歌への合点を京都や地方の方々から依頼され、「御製合点」さえ固辞したことが述べられている。金子金治郎は、「抑御」巻披見申候、毎句殊勝勿論候、付墨事承候」を天理本『広幢句集』の折のこととし、広幢を「旧友」と呼び「存命之中今一度面談申候」と親しみを籠めて懐かしがっていることに注目する。また、金子は「広幢の住所も、書中に『遠界』『遠國』とあつて、都から遠隔の地にあつたことが知られる」とするが、「都鄙」とあることから、兼載在京中のやりとりと思われる。一方の広幢は、『広幢集』等からは鎌倉以西に下向した形跡が見出されず、岩城周辺で使者を介して受け取つたのであろう。

天理本『広幢句集』では、他に行助と宗祇に批点を受けている。宗祇の加点は、巻末に宗祇の合点数と署名があり、その後に広幢自筆の「私云文明十年戊戌十一月此一巻合点所望」の識語がある。この年秋に宗祇は、越後府中の三国峠において（『初編老葉』）、使いをもって依頼したとされる。行助の加点は、巻末に行助の識語があり、「文正二年三月七日／法印大僧都行助（花押）」と署名する。

さて、前掲の二五五〜二五八番の贈答歌は、広幢の生没年を推定する

上でも貴重な資料である。すなわち、広幢は、「ななそちにちか」と詠んでいるから、当時（明応七年（一四九八）頃）六〇代後半であつたことになる。無論、歌人は自己の年齢を必ずしも正確に和歌に詠むわけではないから、七〇歳前後と広く解釈すべきである。ただ、仮にこの時広幢が六六歳から六九歳とすると、生年は永享二年（一四三二）から永享五年（一四四五）とおおよそその年次が得られる。一方、没年は、集中に永正七年（一五〇九）の兼載没の記事が見えないのが不審ではあるが、「平由隆事ありて……」を詞書とする二九一〜二九五番歌を、永正二年の足利政氏・高基の合戦への参陣・敗北を踏まえた詠と仮定すると（後に詳述）、それまでは生存していたことになる。

そして、『広幢集』には、脚氣治療のため「さばこ」での湯治を兼載が勧めたことへの返歌が存する。

さばこの御湯、脚氣所勞にきき及待れば、湯治望のよし兼載書中に、申こされし返事につかはしける

ここにいでていははかしこみ心には君をさばこのみ湯としらなん
（二五九）
（傍線稿者、以下同様）

詞書の「さばこ」は、現在のいわき市常磐湯本町三函と比定される。『拾遺集』物名の三八七番歌に、

さはこのみゆ 読人不知

飽かずして別れし人の住む里はさはこの見ゆる山のあなたか

と詠まれるが、以後、和歌の世界では名所として定着していない。

ところで、兼載の帰郷は、『猪苗代兼載閑塵集』に、

心敬僧都ともなひて白川関見侍りし事は三十余年になり侍り、
文亀始の年、又関をこゆとて思ひつづけける

これも又いのちならずや三十年をへだててこゆる関の中山(三三八)
とあるから、文亀元年(一五〇二)の事蹟とされる。兼載の句集『園
塵』巻四の発句に、

文亀二 正

とけてさへ池や氷のたまみ水

とあるが、文亀二年の七月三〇日の宗祇逝去を記した、宗長『宗祇終焉
記』に、

…このごろ兼載は、白河のせきあたり、岩城とやらんいふ所に草庵
をむすびて、ほどもはるかなれば、風のつてに聞て、せめての終焉
の地をだに尋見侍らんとて、相国湯本まで来て、文にそえてかきを
くられし其哥、此奥に書くはふる成べし。(以下、長歌。省略)

と見えることから、岩城における句と考えられている。前掲注(2)金子
著書が「文亀二年正月五一歳の正月を岩城の草庵に迎えた」と、一応考え
てみよう」と結論づけるとおり、兼載は文亀二年正月に岩城にいたのだ
である。では、なぜ、兼載は故郷である会津黒川に直行しなかつたのか。
それは、文亀二年には既に広幢の岩城の草庵が整っており、従兄弟の縁
故を頼って立ち寄ったからであろう。

II 心敬と広幢

次に、心敬に関する集中の記載や詠歌をみてみたい。記載数が比較的

多い上、それらを検討すると、旧知の間柄であったことが分かる。加え
て子弟関係にあったことは『広幢集』の、

そのかみ愚句の一卷を心敬僧都にみせたてまつりしに、合点し
ておくに書そへて給ひしうた

わかのうらの藻にうづもるる玉をみて老のたもにかくるなみ哉
(二九六)

により知られる。詞書に見える、心敬が加点了広幢の「愚句の一卷」
は現存しないが、老境にあった広幢にとって心敬は、自句一卷への批点
を依頼し得る間柄であったことを傍証する。また、行助・宗祇・兼載に
加点了を受けた広幢が、応仁元年(一四六七)関東に下向した心敬にも批
点を得たことは従来から推定されていたが、事実であったのである。

『広幢集』には、広幢が心敬と同伴して関東に滞在し、広幢のみ岩城
に戻るのを引き止める詠がある。

心敬僧都ともなひたてまつりて関東に月日を送りて、奥州へく
たり侍りし時、心敬僧都よりたまはりし

君いなばなを老が身は敷島の道に袖ひく人やなからん(二九七)

歌意は、君(広幢)が行ってしまったら、老いた私(心敬)の身には、
和歌の道に引き留めてくれる人がいなくなってしまうであろう、である。
ここで注目されるのは、「敷島の道」(歌の道、歌道)がクローズアップ
されていることである。別れの挨拶として相手に敬意を評したと解釈し
ても、心敬にとつて広幢は和歌の道の人であり、少なくとも、教導を請
い得る人物であったことを窺知させる。

心敬が関東に下向したのは、応仁元年(一四六七)であり、その場に

は広幡も同座していたことも、近年全文が紹介・翻刻された、故山田孝雄蔵『宗祇時代連歌』所収「文明五年雪月五日何韻百韻」⁽¹¹⁾によって証される。場所は品川の心敬の草庵とされ、心敬と広幡以外は地元僧侶や被官層の在地武士ばかりである。内題に「文明五年」とある点について、金子金治郎は翌応仁二年（一四六八）に催された「応仁二年冬心敬等何人百韻訳注」と出詠者が多く一致することから、文明五年を誤りとする（前掲注⁽¹⁰⁾金子著書一三〇頁～一三一頁）。また、島津忠夫は、「吾妻下向発句草」の配列からすれば応仁元年冬の句が並んでいるところであり、文明五年の年次は誤りで応仁元年のこととする⁽¹²⁾。なお、本資料を全文翻刻した、重松裕己（前掲注⁽¹¹⁾重松論文）も同様な見解を採る。

広幡は、師心敬の関東下向を聞き付け同伴し、張行の連歌会に出詠し、頃合を見計らって自句の批点を得たというのが真相であろう。なお、心敬述の『所々返答』第二は、この応仁元年に広幡に宛てた書状であるとする説がある⁽¹³⁾。金子金治郎が特に論拠とするのは、冒頭の「此一巻、開散旅宿侍り、誠無比類覚候。然に可引墨由事、纏頭覚候」の記載であるが、前述のとおり、広幡は、応仁元年（一四六七）関東に下向した心敬に、自らの発句一巻の批点を得たことが『広幡集』の前掲二六六番歌により明らかになったため、『所々返答』第二の広幡宛説は、さらに蓋然性が高まったと言えよう。

広幡は、心敬没後の三十三回忌追善に和歌を詠んでいる。

かくてとし月へて心教僧都卅三廻に追善によめる

わびぬれば三十三とせのけふにあふかひも涙はづかしき哉（二二九

八）

草の陰にせめてみえばやしふれどその世にしほる老の袂を（二二九

九）

この三十三回忌追善法要歌は、連歌でも存し、以下にこれを引用する。

永正四年四月十六日、心敬僧都卅三回忌に、経文をくつかむりにおきてさたしける連歌に

跡遠き世をや忍び音時鳥

この『園塵』巻四以外に「心敬僧都卅三回忌連歌」は他に句が拾遺できず、証本も現存しない。ただ、『広幡集』の出現により、同時期に広幡が二首の和歌を詠んでいたことが新たに明らかになったのである。

Ⅲ 顕天と広幡

広幡の息は、兼純が有名であるが、一方、顕天が広幡の実子であることが『広幡集』により新たに判明した。『広幡集』二六〇～二六三番歌には、

兼載法橋のもとに顕天をつかはして此道の学又させし時、たよりにつけて顕天かたへつかはしける文の末に

なにせんに千々の金も一ことをしへぞおもきたからならまらし
あひそふるおやのまもりの心だにまじはりなれぬしるべとをなれ
しらなみのたちでもあてもふかき洩うすき水の道な忘れそ

とある。広幡と顕天との親子関係は、「あひそふるおやのまもりの……」により明白である。そして、広幡から兼載のもとに遣わされた顕天の精進の痕跡は、従来知られていた、現存の伝本に見い出せる。まず、『竹林抄』の注釈書である、名古屋大学付属図書館蔵『竹聞』の本奥書に、

文亀三年七月十五日 酉刻 於

会津黒川聴聞終了 天（稿者注、顕天）

と見える。

また、京都大学付属図書館谷村文庫蔵『源氏秘訣』は、宮内庁書陵部蔵『源語秘訣』に比して、「松殿宰相忠顕脚本」を以て書写した由の本奥書がある。そして、「揚名ノ介」「ネノコノ餅」「トノ井物ノふくろ」の「三ヶ大事」について記し、それに続き次のようにある。

此外ニ義理ナトニ心得大事ノ事共アレトモ先是ヲ上古ヨリ三ヶノ大事ト号セリ、古今ナトニハ切替アレトモ是ハナシ、タ、口伝スル習ナリ、兼載ハ宗祇ヨリハ三ヶノ事直ニハ不聞給也、木戸殿ヨリ口伝ス、宗祇も木戸殿ヨリ口伝アリ、宗祇ニ聞給ひし時は肖柏同学也、宗祇ヨリ直ニ聞給はぬ子細共アリ

於会津

耕閑軒ヨリ如此聴聞口伝了、全部無不審相残

永正三年（丙／寅）五月十七日戌刻

顕天在判

この後、書写奥書の、

此本兼如相伝而被秘説懇望して書写するもの也、可秘々々

慶長十三年九月十二日 正益（花押）

が存する。「正益」は兼如弟で、該本が猪苗代家に伝来したことが知られる。¹⁵⁾

前掲『竹聞』の本奥書に拠れば、文亀三年（二五〇三）七月に兼載は、会津黒川に帰郷していた。前掲『源語秘訣』に依拠する限り、兼載によ

る顕天への講釈は永正三年（二五一六）五月まで続いたのである。

そもそも、兼載と『源氏物語』の関係は、独吟百韻全てに源氏物語の巻名か所載の地名を詠み込んだ、京都大学付属図書館谷村文庫蔵『永正二年十二月十二日兼載独吟賦国名百韻』（外題「源氏国名」）により著名である。そして、平井相助（連歌師。大内政弘支族）の仕事（「千鳥抄」）に導かれ、青表紙本と河内本との区別の基準を記した、宮内庁書陵部蔵『源氏物語青表紙河内本分別条々』（外題「千鳥」に合綴）の研究があり、深い見識を有していたとされる。¹⁶⁾ 広幢が兼載に息顕天を遣わしたのも、兼載の学識を期してのことであろう。

なお、『園塵』巻四には、

同（稿者注、「永正四年四月」）廿一日、顕天興行に
みのるべき秋風ふくむ早苗哉

と見え、永正四年には、顕天は既に、地元で連歌会を張行する力量を持った連歌師に成長していた。顕天には養子を含め子女が確認できず、その学統が後代に継受されなかった。だが、後に触れる兼純―長珊の系統とは別に、父広幢に『源氏物語』研究の継承の意志が存したことは証される。

IV 顕材と広幢

兼載没後の享禄元年（一五二八）に一七四代の建長寺の首座に昇った（『禅長寺文書』所収、享禄元年閏九月十二日付「足利義晴公帖」）禅僧、用林顕在との交流が『広幢集』の発見により明らかになった。この事象は、『広幢集』において、広幢が、禅の教義を踏まえた「道歌」を多作した源泉を考える上で重要である。また、顕材は、広幢を取り巻く人的ネットワークを解明するカギとなる人物である。まず、『広幢集』の該当箇

所を掲げる。

顕材首座、相州鎌倉へのほり給ひし時、詩を作て送し末に
もろ共に行てや富士をながめまし雪をいたたくわが身ならずは(二
八九)

身に老をいとふ心ぞかはりぬる君を二たびみまほしさに(二九
〇)

「顕材首座」とあるから岩城の禅長寺の首座であった時の詠であろう。

顕材の出自や事蹟については、『日本歴史地名大系七 福島県の地名』
(平五・平凡社)「禅長寺」項において、「地元の領主岡本妙誉(稿者注、
岡本氏は陸奥国岩崎郡金森村地頭の家。「岡本文書」に拠る)の子で、仏光
寺派と称される鎌倉円覚寺開山祖元の系統に属する禅長寺住持や建長寺
内の高峰顕日の塔院である正統庵の塔主となり、享祿元年(二五二八)
建長寺第一七三世に就任した」と記される。この「正統庵の塔主」に関
連して、玉村竹二『五山禅僧伝記集成』(昭五八・講談社)の「用林顕
材」項では、出典は不明ながら、「子敬□虔という僧(これも関東の人ら
しい)が建長寺の公帖を受けた際、横川景三に託して、その山門疏を代
作してもらっている。時に文明一七年(二四八五)の事で、この頃上京
中であつた事を窺わせる。時に法階は蔵主であつた」とする。ただ、
『補庵京華別集』(玉村竹二編『五山文学新集 第一卷』(昭四二・東京大学
出版会)に拠る)には、

文明十五年歳舎癸卯蠟月吉辰、前相国横川景三、

虔子敬住建長同疏

用林材蔵主代

とあり、実際には文明一五年のことである。また、「用林材」は、「用林

材蔵主代」とあることから底本私注に記される用林梵材ではなく、用林
顕材であろう。『広幢集』二二八九・二九〇番歌の贈答は、「顕材首座」と
あるから、遅くとも、建長寺蔵主として山門疏の代作に関わる文明一五
年(一四八四)以前である。さらに、禅長寺は、建長寺の西塔であり、
元来禅長寺の首座であつた顕材は、文明一五年には、正統庵塔主を経て
建長寺の蔵主に就任していたから、これ以前に顕材が岩城と鎌倉とを往
復するに際し、広幢を伴つたことも十分に考えられる。

V 広幢と平(岩城)由隆

平(岩城)由隆は、室町中期に惣領として磐城平大館飯沼の平城を拠
点に活躍した国人領主である。由隆の父と子を含めた三代(常隆・由
隆・重隆)の時期に、岩城氏は、北は陸奥国楡葉郡から南は常陸の一部
にまで及ぶ広大な地域を支配した。系図等により岩城由隆の系譜や伝記
を示すと、まず、東京大学史料編纂所蔵『岩城伊達葦名系図』所収「岩
城系図」に、

常隆 岩城下総守
可山明繁 由隆 岩城民部大輔
鷹山 重隆 岩城左京大夫
月山 (略)

とあり、岩城常隆の男である。また、「上三坂小泉文書」(須藤春「東北
中世史(岩城氏とその一族の研究)」(昭五〇・白銀書房)中の影印に拠る)
に、

大館民部大夫/由隆

応仁二戊子六月十一日生/文明十四壬寅正月元服/同十七年家督

同十八年/丙午八月源儀尚朝臣征夷大將軍宣下後參勤/管領斯波治

部大夫義兼/对之同十月中旬帰国

とあり、応仁二年（一四六八）六月一日生、天文十一年（一五四二）二月没である。

さて、由隆と広幢の交流は、『広幢集』二九一～二九五番歌に、

平由隆事ありてこまごめといふ山ざとに引こもり給ひし頃、つ
かはし侍し

をざさはむ駒こめてたつ雲霧のおくの山ざと行てとはばや

清くしてちりなき水も及めやしづけき山の君が心に

老せずは行てぞみまし山も川も君によりつつ清きあたりを

逢見えば君や哀とおもはましあさ夕かよふ老の心の

君もしれ八十におほくあまりぬる人だに山はいでし習を

とある、由隆の隠遁に際しての贈歌である。「こまごめ」とは、現いわき市北東の四倉駒込のことである。広幢が、当時の岩城の国人領主、平（岩城）由隆と相手の境遇を斟酌して和歌を贈り得る関係にあったことは注意される。

では、詞書の「事ありて」とは何を指すのだろうか。想定されるのは、古河公方・足利政氏の要請による足利高基・宇都宮忠綱・結城氏・那須氏らの連合軍との合戦と敗北である。

永正三、四年（一五〇六、七）の頃、古河公方の足利政氏と高基の父子の間が不和になった。永正六年に一端和解したが、永正九年再び対立し、永正十一年頃その対立は頂点に達したとされる（『いわき市史 第八卷 原始・古代・中世』〔昭五一・いわき市〕。関東諸氏の多くが高基に与したため、政氏は岩城氏の老臣岡本妙誉や禅長寺の用林頭材に書状を送って奥州諸氏に加担を求めた。中でも岩城常隆・由隆には再三書状を送り、岩城氏父子や佐竹義舜の出陣を要請している（秋田県歴史資料館蔵『秋田藩家蔵文書一』所収「岡本元朝家蔵文書」）。その中で、頭材西堂

の出頭を歓迎する一状を掲げよう。

依岩城父子相頼、頭材西堂被告参候、云炎氣、云遠路、劬勞痛候、雖然此度之事、御身体安否候之間、西堂被参之条、御高運候、別而雖被成御書候、被染御自筆候、急度属御本意様、西堂相談走廻候者、可為御悦喜候、謹言、

六月三日 政氏（花押）

禪長寺

禪長寺

こうした政氏の意向どおりの頭材西堂の出陣にも関わらず、永正十一年に岩城・佐竹勢は宇都宮竹林の地で猛攻を受け、千騎あるいは二千人ともいう討ち死をしてみました。『塔寺八幡宮長帳』に、「八月十六（岩城）ゆわきぜい、うつの見やへ出、千きはかりうちしにめされ」とあり、『今宮神社祭記録』には、「同十一 甲戌氏家郷 舟生朝負／宇都宮国へ佐竹岩城罷出竹林において一戦にて敵二千人討死仕候」と見える⁽¹⁷⁾。翌永正十二年（一五一五）三月二十七日に政氏は、

去年一昨年已来、被成使節度、被思召候之処、通路断絶之間、遅々非御無沙汰候、数輩或討死、或被疵之条、感恩召候、下総守・民部大輔・同次郎忠信、無比類候、猶以能々可加意見候、巨細町屋蔵人入道、可令対談候、謹言

三月廿七日 （花押（政氏））

中山讚岐守殿

と、戦後は交通が各地で道路が戦略上遮断されていることを述べ、今回の騒乱に協力した武将に感謝の念を表している。特に、下総守（常

隆)・民部大輔(由隆)・同次郎(政隆)の「忠信」を言葉を尽くし深謝している。ただ、この時由隆は四六歳で、家督を継いでいた。敗退に対する悲嘆や落胆は大きかったであろう。こうした出来事が、由隆を駒込へ隠遁させた要因であったと思われる。

ところで、先の由隆の通世をめぐる歌群(二九一〜二九五)には、末尾に、

君もしれ八十におほくあまりぬる人だに山はいでし習を

とあった。下句「人だに山はいでし習を」は、直接体験の過去の助動詞「き(し)」を使用しているから自身の行動であることが分り、後述するように、広幡が、今までの草庵における風雅な生活が一変し、精神的に追い詰められたことを踏まえていると思われる。先に稿者は、広幡の生年を永享二年(一四三二)から永享五年(一四三五)頃と仮定したが、二九五番歌が詠まれたと思われる永正二年(一五一五)には、八〇歳から八三歳となり、「八十におほくあまりぬる」の表現と整合する。当該歌が詠歌年次を推定できる最後の詠であるから、永正一八年に兼純が『広幡集』跋文冒頭において広幡を「亡父」と称しているように、永正一八年以前に死去していることは確実であり、広幡は、永正一二年から時を隔てずして没したのではないか。

由隆は、和歌や連歌に関心が深く、とりわけ連歌師宗長を懇意にしていた。両者が頻繁に書状を交わし、宗長の岩城下向を促す記事が、『宗長手記』大永七年(一五二七)七月頃と享禄三年(一五三〇)九月頃の二箇所に残る。

I 奥州岩城民部卿大輔由隆、多年書状通用にて、たびたび座頭あまたくだしつるに、いづれもあるは勾当まで四度・五度の扶助。此度泰

昭白河一見愚状。去年夏より彼館にて越年。此六月上られぬ。色々芳志。道の物、可然馬ひかせのほせる。されば、かつは愚老もうら山しくおぼえて、泰昭の文の伝達のようにして

八十ぞよもしもなをながらへば岩木の奥の中にかくれむ

述老懐俳諧一笑々々。：

II 奥州岩城民部大輔由隆、この十ヶ年音信。殊この春より、及三ヶ度書状。一夏下向のこと、たびたびあらましのみにて過行。発句を所望に、かならずの秋はなどいふ心なるべし。

関こえんあらまじやこの秋のかぜ

しかれば、迎などやうにて、又音信あり。

ながらへてことしもいまはすゑの松まつらん波をこさせずもないかでせめて今年ながらへて春はなど申送るなるべし。去年は迎としてしかるべき馬二疋送りのぼせらる。一疋は氏綱所望に候、このごろひかせ下つ。同国会津に、和田図書助、千句とて発句所望。会津物色々音信。：

I IIによると、宗長は由隆の庇護を受けて、岩城下向を促されている。特に、Iでは琵琶法師の座頭を下向させて扶助するのみならず、勾当を数度にわたり扶助し、さらに、白河紀行した泰昭を磐城平大館で越年させている。こうした記事に見える由隆自身の和歌・連歌・平家琵琶への関心や教養に鑑みれば、由隆が岩城に草庵を構えた広幡の庇護者であったことは、容易に想像されよう。

岩城氏と猪苗代家の関係は、兼載においても存した。『園塵』第一に、

白土撰津守家にて

さなへとるあとさへ水のみどり哉(五四)

志賀備中守家に旅宿し侍しころ

えにあらで宿やは借りねあやめ草(五五)

岩城総州家にて

五月雨に夏のがき朝かな(六〇)

塩左馬助張行に

雨白し空や明がた五月やみ(六一)

とあり、六〇番の句の詞書の「岩城総州」は、岩城由隆の父常隆である。以下、白土氏・志賀氏・塩氏はいずれも岩城氏の支族か重臣である。「園塵」第一の詞書の考証から明応八年(一四四九)の事蹟とされる。¹⁹⁾

『兼載雑談』は師兼載から兼純への晩年の聞き書である。永正年間(一五〇四～一五二〇)後半には、兼載・広幢とも没し、猪苗代家を継承していかなければならない境遇にあった。兼純は岩城出身であるが、広幢とは異なり京都に数度下向し、連歌のみならず、和歌や物語の、当代一流の専門家の門弟となつてゐる。記録に最初に現れるのは、永正二年(一二五五)十一月一日の宗長を迎えての三条西家邸における「何人百韻」²⁰⁾である。「再昌草」には、

十一日宗長来りしに、連歌興行すとて
待こしや花に紅葉にけさの雪
同日 短冊とりかさねしに 寒樹交松
霜がれの木ずゑをのが緑もて色とりかへす松のむらだち

と記される。兼純が宗長主催の連歌・和歌会に出席できたのは、宗長をことのほか懇意にしていた(前述)岩城由隆の後押しがあつたのではな

いか。そして、兼純は冷泉為広に入門し和歌を学ぶが、この永正二年(一二五五)在京当時の詠とされる、祐徳稻荷神社中川文庫蔵『為広詠草』には、

此会幽琳ニテ有シナリ

同八日、兼純法師門弟に成侍て歌張行せしに、松有佳色

霜の花に十かへり見せて神無月春も名高き軒の松が枝(一二五)

と至る旅程途上の二ヶ月程度と推定されるから、草庵を構える余裕があつたかは疑問なのである。

VI 兼純と広幢

とある。この歌の直前に落丁があり(底本には「朝郭公 此次一枚落丁」とし、九行分の空白がある)、前からの続きは不明であるが、この後の続きが永正一三年の詠草となることによる推定から、永正一二年と考えら

れている。⁽²¹⁾

永正一六年（一五二九）二月二十九日には、宗碩の草庵にて兼純の帰国を送る会が持たれ、「何船連歌」⁽²²⁾が催された。「再昌草」には、

十九日、兼純すすめにて、宗碩が草庵にて連歌あり、十九首題書てつかはし侍し

梅花この世のつねの心かは苔の袖をもわかぬにほひは

同発句

帰雁おもへば花にいは木かな

兼純近日下国云々 奥州岩城の者也

と記される。次に兼純が上洛し、『実隆公記』『再昌草』等の記事に兼純の名が見えるのは、大永三年（一五三三）七月二十五日である。『広幢集』編纂の永正一八年（一五二二）一〇月には当然岩城にいたことになる。ともあれ、大永三年の上洛の折には、長珊を伴い実隆邸を訪れるが、実隆から『源氏物語』の講釈を受けるのが目的で、翌日早速実隆に申し入れ、八月二一日に第一回の桐壺の巻を講読している。『実隆公記』同年八月二〇日条には、

兼純源氏発起、桐壺巻読之、長珊（弟子／同聴）打曇十五枚持来、

兼純柳一荷・食籠携之、源氏読了、勸一盞、

と長珊の名が初めて現れる。以後、一日置きあるいは数日置きと講釈は進み、翌四年四月一四日条に、

兼純来、源氏乙女巻読了、先以此巻為結願、一献勸盃

とあり、一応の終了を迎え、結願としている。この期間の体験が、陽明文庫蔵『長珊聞書』の著述に多大な貢献をしたことは、伊井春樹が説くとおりである。⁽²³⁾これは、帰郷が近くなつたためとされ、実際、同年五月九日には実隆邸において兼純張行の三十首統歌が行われ（『実隆公記』『再昌草』）、同二一日には、実隆が、

兼純本国へかへる餞別に

老が身のくちぬときかはあはれしれ石木もなる名残やはなき

の一首を贈り、別れの名残を惜しんでいる（『再昌草』）。この歌の「石木もなるる」の「石木」は「岩や木」と「岩城」の掛詞で、「くちぬ」の縁語であり、下句全体は、「非情な木石を思わせる名の岩城に住む者も、（京都に在住して）慣れ親しんだ名残惜しさのないことがあろうか」の意になる。元来、岩城の者で、頻繁に「本国」の岩城と京都を往復している意が込められていよう。また、同じ時に為広から扇を貰い、かつ、ふるさとはよいそぐとも又かへりあふぎの風のたよりわするな

の詠を得た（京都大学付属図書館谷村文庫蔵「出題御免許之御添状并詠歌」）。なお、井上宗雄によれば、最終的に為広から出題免許状を得たのは、前掲「出題御免許之御添状并詠歌」の巻首「出題之事於田舎就無道者二可被出之候也」の記載により、大永四年三月二六日とされる。⁽²⁴⁾

こうした兼純の頻繁な上洛、実隆邸訪問の目的は、勿論、『源氏物語』の学殖を深めるためであろうが、一方で京都の公家や連歌師と交流し、地元における自己の権威を高めることにあつたと思われる。すなわち、大永四年に至り為広から出題免許状を得たことは、岩城で歌人として活動するに当たり、威力を発揮したに相違無い。そうした権威は、地元の

戦国大名との関係においても同様で、大永四年三月二四日の『実隆公記』に、

及晩宗長来、兼純来、伊達左京大夫詠草令見之、白鳥一、黄金一兩送之

とあるように、伊達種宗の詠草を取り次いでいるのは、陸奥を代表し、京都師範と確固たる人脈を持った歌人として伊達家から認められていた証左である。『連歌師千佐歌書抜書』（大日本古文書 伊達家文書 家わけ之三 伊達家一）等所収の、天文一八年（一五四九）の記録に、「伊達左京兆年来兼純扶助有し上、風雅之道不怠、嗜御数寄誠に難有事也」と見え、兼純が伊達種宗から長年扶助を受けていたことが知られる。為広から出題免許状を得た時期が、大永四年三月の三日間に集中するのも決して偶然ではないであろう。

永正年間に兼載・広幢と相次いで師範と肉親を亡くした兼純は、広幢から①岩城に拠点を置いた、京都との往復によるその道の第一人者への師事、②岩城氏ら在地の戦国大名の扶助と交流、③和歌の実作の研鑽、の三点の父広幢の行き方を受け継ぎ、大永四年までに後継者の長珊²⁵へと連歌の道の学統を伝える基盤を築き上げたのである。とりわけ、①の、岩城に拠点を置きつつ、連歌・和歌・物語の第一人者に師事することは、広幢が心敬の関東下向の機会を見計らって関東まで下り、交流を重ね、連歌の批点を請う姿と重なる。無論、これは今回『広幢集』の出現により明らかになった歌人としての広幢の資質や技量(③)と関連する。②については、広幢には、兼純のように地元の武家歌人の詠草を取り次いだ事蹟は確認できないが、それは逆に、京都まで下向せず、生涯岩城に在住し時折関東に下向していた広幢の行動圏を浮き彫りにする。ただ、この「岩城在住」という点は、兼純にも確かに継承されており、前掲し

たとおり、実隆に「岩城」「本国」「再昌草」、為広に「ふるさと」(出題御免許之御添状并詠歌)の者の印象を与えているのである。

すなわち、猪苗代家の兼載や同時期の宗長や宗牧がそうであったように、連歌師は旅をして滞在各地で連歌会を張行し、戦国大名の扶助を得たが、広幢と兼純の行動範囲は、彼らと比較にならない程狭い。むしろ、地元岩城に密着しながら、国人領主から戦国大名へと成長した岩城氏、そして兼純に至っては伊達家の庇護を受けているのが特色なのである。

残る問題は、広幢の出自や経歴である。稿者は次の二点から禅長寺で若年期に得度・修行し、その後和歌連歌の道に転じてからも禅長寺と関わりがあった人物と考えている。理由の第一は、用林頭材との関係である。禅長寺の住持にして鎌倉建長寺とのパイプ役を果たした頭材と早くから贈答を交わす仲であったことから、広幢が禅長寺出身の禅僧であった蓋然性が高いと言えよう。第二は、岩城惣領との関係である。『広幢集』に残るのは由隆との交流のみであるが、広幢が一介の隠遁者ではなく、岩城惣領と深い結びつきがある禅長寺の関係者であったからこそ、由隆の不遇な身の心境を斟酌する和歌を当方から贈り得たと考えられる。次節で論じるとおり、広幢は資質がやや内向的である上、禅籍への学究心が旺盛であったものの、禅長寺内部の叙階には関心がなく、「草庵」を構え数寄に生きた人物であったと思われる。

③ 広幢の和歌と生活

本節ではまず、広幢の実際の生活を窺い得る、草庵における独詠歌群(三三三～三五五、二八首)の冒頭一首と同じく独詠の一首を掲げよう。

草庵の軒端に地主の花の色香すぐれたるがさきおほひたるを見侍りて

草の戸に心ありせば一花に事たらましをかくも開哉(三三三)
 (以下、草庵を視点とした桜の類型的な和歌が二八首がある。省略)

Ⅱ柴扉にあたる一桜花一老身に対して廉々たるをつくづくとな
 がめりて、此花の開盛落の三時の心の彼経の三世三心不可得と
 真一にして自己同前と通徹せる靈妙をつづけ侍る

わがむねの内外にぞみる得べからぬ三世の心もはなの心も(三六
 六)

まず、Ⅰであるが、晩年には寺院を離れ草庵を営んでいたことが知られる。土地の守護神に咲いた桜の絢爛さを詠む。Ⅱでは草庵がより細かく描写され、花の「開盛落の三時」から「彼経(稿者注『金剛般若経』)の三世三心不可得と真一にして自己同前と通徹せる靈妙」を想起し詠み綴った詠である。「三世三心不可得」は、『金剛般若経』の「過去心不可得 現在心不可得 未来心不可得」を縮約した表現であり、他に広幢は「道哥あまたの中」と称する一連の歌群(四〇〇～四四四、四五首)の中で、

三心不可得

心とめて後先今も得べきなしそれこそはただ真なりけれ(四三七)

と詠んでいる。「自己同前とせる靈妙」は難解であるが、当該歌を詠む限り、広幢が、同じく「道哥あまたの中」の歌群の中で、

内外通徹

何もみなのことさず是にはらまれてらはまれながらこれをはらみぬ
 (四三九)

と詠む「内外通徹」と類似した意味で使用しているようである。道元は『正法眼蔵』において「如一面古鏡」の道は、一面とは、辺際ながく断じて、内外さらにはらざるなり。一珠走盤の自己なり」と説述している。また、『安智禪師語録』には「平尾平正 内外通同」とあり、「内外通徹」は「内外同前」とほぼ同義であろう。広幢が単なる数奇の隠遁者ではなく、日常的な実感を豊かな禅籍の知識を踏まえて和歌に詠む人物であることが分かる。『広幢集』の所収歌が晩年の詠にほぼ限られるのは残念であるが、禅長寺で修得したと思われる禅の学識が生きている。

次に、注意されるのは、母の逝去の際の詠である。大きく分けて二つの歌群(Ⅰ(一〇四～一〇九、六首)Ⅱ(二六九～二七六、八首))がある。

Ⅰ北堂の帰寂を悼たてまつり、彼尊号をある卑懐をのぶるのみなにか世にそのままならんかくこそはたれ共に思ふぞいとどかなしき

むかしよりつゝに独ものがれえぬわ。れを人の上にみんやはありし世の八十をながきはひぞとみえつる事よ春の夜の夢みしはみなきえゆく露の世中にあはれけふまでふるぞあやしき
 ただいまを忘がほにて老が身の人のわかれをとふぞはづかし
 ふぢ衣きみよいだくな思ひ侘ぞかりにぞきえし今をいまずを

Ⅱ母の身まかり侍りけるころ

ちりはつるははその陰は事たらで涙ばかりぞ袖にみちぬる

(六首省略)

八十あまり四とせの夢ぞ覚にける心一はそのままにして

Ⅰ歌群にある「尊号」とは道号のことで、広幢は「惟心」であった(四五番歌・詞書)。「彼尊号をある卑懐をのぶる」とは、道号を得ていても数寄者に成り果てた自己が、肉親の死を前に限界状況に無力であるこ

とを誠実に吐露したのではないか。実際、例えば、一〇四番歌の「みしはみな」の詠は、「世の中」のはかなさを「露」に喩える趣向であり、『新古今集』釈教・一九九七番歌の「清水観音御歌」と言い伝える、

なにか思ふなをかなげく世中はただあさがほの花のうへの露

の先行詠に明らかかなように、和歌の世界で一般に詠まれてきた無常観を詠むに留まる。

また、広幡は、I歌群の一〇七番歌に「八十をながきよはひ」、II歌群の二七六番歌に「八十あまり四とせ」とあるように、八四歳の往生であった。当時、広幡自身が七〇歳近くであり（前掲二二五番歌）、一五歳ほどしか年が離れていなかったことになる。このことは、別の箇所において広幡自身が、

（述懐の歌の中に）

たらちねにさのみおとらぬ老の身は心ほそさそそひて悲しき（二六八）

と、年齢の近さを表白していることにより裏付けられる。この母との死別は、逆に禅僧としての広幡の資質にも影響を与えており、期せずして後半部のモチーフとささなっている。例えば、前掲の「道哥あまたの中」の歌群において、

生^{（死力）}下不別

たらちめにわかれもはてぬさかひをば我だにしらず誰に問まし（四一七）

と詠んでいる。歌題は、『碧巖録』の、

…仏今何在 明知与我生死不別…

とあるのが出典と思われるが、教典や仏語の内容を身近な景物に託して詠むのが一般的な道歌に、広幡は私事の不幸を詠んでしまったのである。また、当該歌の存在により、「道哥あまたの中」の一連の歌群が、母との死別の後に詠まれた作と判明する。

実母の死への慟哭と迫り来る自己の老と死への不安は、前掲の、

（述懐の歌の中に）

たらちねにさのみおとらぬ老の身は心ほそさそそひて悲しき

に端的に表されており、近隣縁者への哀傷・追善歌（群）が増え、「道歌」を多く詠作するに至るのも、母の死を契機としていよう。近隣縁者への哀傷・追善歌（群）も後半に多く、四八首に及ぶ。その中には、禅僧としての世界観を示した詠も見出せる。例えば、「哀傷の哥の中」の歌群（三〇五～三一七、一三首）に、

うつつとは何をおもはんあるはみな夢まぼろしと説をける世に（三一五）

という一首があり、「説をける」が和歌の表現としては生硬で説明的に過ぎるが、例えば、『碧巖録』に、

…三界唯心方法只誰 所以夢幻空花何劳把握…

と記される観念を踏まえていよう。

「道歌」や述懐・哀傷歌（群）からは、草庵の花に託して和歌を詠み、数寄の世界を堪能していた隠遁者から、本来の禅僧への回帰の軌跡を辿り得るのである。草庵では、

のどかなる日、例のはなの前に苔をしきつくづくとながめて、
老はつる身をも世のことはりを思はず、時をうつしてねぶり
けるが後に心出来てよめる

ながめゐて花をも身をも心をもわすれけるかな入会のかね（三六七）

と、明るい牧歌的な歌を詠んでいた広幢が、母の死後、

世の人の色香にそみさはがしきころ、母のおもひにて籠る事
五十日におほくあまり侍れども、いかにとたづぬる人も侍らざ
りけるに、卅年この所にたちとどまりぬるえにしのほどもかつ
はつたなしかへりみられ侍るころ、彼周公の伯禽にあふて故
旧無大故則不捨の好語おもひ出られて、おなじ文字なき哥をい
ひて老の心をなくさめ侍る

ふるき文をゆへなくすてつあさはかの道にそむ世やほこりぬらし

（三八〇）

と、遺品整理に際しての追悼者の不問を、『論語』微子第十八の、

周公謂魯公曰、君子不施其親、不使大臣怨乎不似、故曰無大故、則
不棄也。無求備於一人

を踏まえて詠み、近隣の人々の冷淡さを慨嘆している。ここでも自己の老いが詠まれていることに注意したい。

おわりに

本稿で明らかにし得た広幢の文学事蹟の内、最も特筆されるのは、「何人百韻」出吟のための関東下向の折に、同伴した心敬から、

君いなばなを老が身は敷島の道に袖ひく人やなからん（二九七、詞書省略）

と、歌を贈られていることであろう。応仁元年（一四六七）の時点で広幢は心敬から歌人として力量を認められていたことになる。この応仁元年頃までには既に相当の歌稿を書き溜めていたと思われるが、『広幢集』には晩年の作が多く、若年期の詠は含まれていない。恐らくは禅長寺で道号を得、早くに草庵を構え、和歌・連歌の道に入ったのではないか。そうした数寄者でかつ歌才のあつた広幢を、地元の岩城由隆が扶助していた可能性は高い。七〇歳前後に至つての母との死別は、歌人としての広幢に衝撃を与え、禅僧に本格的に回帰する契機となり、自己や他者の老いと死に対する内省的な心情は、「道歌」群等に結実したのである。

先述したように、岩城氏ら地元の国人領主の扶助を受け、岩城を拠点に活躍する行き方は、兼純に受け継がれ、大永年間に後継者の長珊へとその学統を伝える基盤を築き上げた。兼純は広幢とは異なり、京都まで積極的に下向し、和歌・連歌・物語の第一人者と交わり教えを請いたが、活動拠点が岩城に存したことは、『再昌草』『実隆公記』の「岩城」「本国」といった記述にはの見える。本稿冒頭に掲げた、兼如の「岩城なま」の逸話は、岩城と京都を頻繁に往還する連歌活動の表れで、そうし

た行動様式が兼如まで続いてきたと解される。

しかし、地元を本拠としつつも京都の和歌師範に師事し、扶助を受けている戦国大名のために動く連歌師の家が、まさしく広幡を源流とする猪苗代家であった。ところが、兼載は堯恵から古今伝授を受けており、兼純に『古今集』の講釈をする資格があった(『古今私秘聞』)一方、広幡は誰からも古今伝授を受けていなかったため、心敬から実作について相応の評価を得ながらも(前掲『広幡集』二九七)兼純に古今伝授がでさず、和歌の家、猪苗代家の創始者とはなり得なかつたのである。前掲の京都大学付属図書館谷村文庫蔵『猪苗代家代々伝授控』と大阪天満宮御文庫蔵『連歌相承家系図』の血脈が多く一致するように、古今伝授の師資相承は和歌の家の系図に転化し、広幡の名が消えていくのは必然であった。こうした和歌の家の歴史から消えて行つた広幡の家集を精読・分析し、猪苗代家の源流を探究した上で、兼純が広幡から受け継ぎ、長冊に伝えた連歌師の一行動様式を掘り起こしたのが本稿である。

註

(1) 綿拔豊昭「猪苗代兼如とその周辺」(『連歌俳諧研究』第六〇号、昭六〇・一、後に『近世前期猪苗代家の研究』(平一〇・新典社)に再録)に所引される。後掲『兼与法橋直唯聞書』の記述は、

或時、兼如連座遅参の時、玄仍、何とて如遅く来り給ふぞ、いつものくせ哉と被云。其時、如、道のぬかり故に遅参と被申。玄、又例の田舎詞と笑。

である。また、『兼如発句帳』には、無論、京都における発句が多い一方で、

岩城殿例年の会廿五月初めに

あらたまる色香は梅の立枝かな

岩城忠義次郎殿宿願事有て御所望

冬木ぞとみし陰いづら梅花

岩城貞隆御祈禱の会に

所えて若竹たかき園生哉

と、岩城貞隆邸における連歌会の句が収載されている。なお、兼如関係の史(資料)の所在については、前掲綿拔著書に多くの学恩を蒙った。また、米沢市

立図書館寄託「米沢家文書」巻十六「相馬藩衆臣系譜」の「兼如」項に、「有子孫居岩城自伊達宗守受資力在京半年在国半年」とある(金子金治郎『連歌師と紀行』(平二・桜楓社)四二頁に所引。原本の所在確認・調査に当たっては、佐藤孝徳氏の御教示を得た)。

(2) 兼載の伝記については、金子金治郎『新版 連歌師兼載伝考』(昭五一(初版は昭三八)・桜楓社)が委曲を尽くしている。また、これ以前に、上野白浜子・林毅編『猪苗代兼載年譜』(昭三四・兼載四百五拾年記念会)・上野白浜子・林毅編『猪苗代兼載故郷へ帰る』(昭三五・兼載四百五拾年記念会)の業績が存する。そして、黒川昌享「新出の兼載歌集閑塵集について」(『連歌俳諧研究』昭四九・八)、金子金治郎「兼載伝の再吟味」(『中世文芸叢書』別巻三(昭四八・広島中世文学研究会)、湯之上早苗「兼載と興俊」(金子金治郎編『連歌と中世文芸』(昭五一・角川書店)が兼載の伝記・作品研究に新見を加えている。

(3) 兼純の伝記的事項については、前掲註(1)金子著書の他、同『兼載独吟千句注』について(『ピリア』第四九号、昭四六・一〇)にも触れる。また、井上宗雄「中世歌壇史の研究 室町後期」(初版昭四七、改訂新版平三・明治書院)に詳しい。

(4) 拙稿「国立歴史民俗博物館蔵田中穰氏旧蔵『広幡集』—書誌と翻刻—」(『古典遺産』第五四号、平一六・九)(以下「前稿」と称する)。「広幡集」の書名や存在自体は、後掲の川瀬一馬「田中教忠蔵書目録」(自家版・昭五七)により知られていた。以下、管見に入った発言を掲げておく。

① 川瀬一馬「田中教忠蔵書目録」

「後土御門院廣幡集 一冊/永正十八年義純寫。江戸時代濫刷毛目表紙附、改装。美濃本」(冒頭に二丁表と三四丁表の兼純跋文の半面の写真が掲載)。

② 前掲註(3)井上著書補注篇八二四、八四九頁

「『田中教忠蔵書目録』に、『後土御門院廣幡集』という一冊本が掲出され、写本版を見ると家集のようだが、詳しくは分からない。末に「于時永正十八年十月十七日 桑門兼純」とある。後にも触れるが、兼純の父広幡の家集か。」

「『上に広幡の名を記した点で一言すると、田中教忠蔵書目録に後土御門院廣幡集とあるのは、写本版によると、永正十八年十月十七日の奥書があり、亡父の詠を集めたものようである。後土御門院とあるのは不明。」

③ 国立歴史民俗博物館資料目録「一」田中穰氏旧蔵典籍古文書目録「古文書・記録類編」(平一二・国立歴史民俗博物館)

「46 広幡集(後土御門院広幡集) 一冊 永正十八年写。」

(5) 『連歌貴重文献集成 第三卷』(昭五六・勉誠社)「広幡句集」に影印が掲載され、解説(金子金治郎執筆)も備わる。行助加の「広幡句集」には三巻とも

加筆者式後の末尾に源（中院）通村の仮証奥書が三巻とも存する。兼載加点の「広幡句集」に限り掲出しておく。

此一巻法橋兼載合点広幡句集／加佳什一篇尤可握腕者乎／特進源（印章）

なお、「弘文荘名家真蹟図録」（昭四七・弘文荘）五五「廣幡連歌付句（廣幡自筆／宗祇自筆加點）」一巻は、天理本『広幡句集』の第二巻とは別本である。但し、筆蹟・書式が天理本『広幡句集』に酷似するので、写真版により知り得る限りの書誌的事項を摘記しておく。端書に「御点之内／長可賜／候／広幡」とあり、巻末に「付句廿六句／宗祇（花押）」とあり、対の付句が一時下がりなのは、天理本『広幡句集』と同様である。本文五〇句。佳句二六句に合点し、さらなる再佳の句に長点をかける。

- (6) 綿拔豊昭「猪苗代兼与の古今伝授」(『和歌文学研究』第五一号、昭六〇・一、後に「近世前期猪苗代家の研究」(平一〇・新典社)に再録。なお、大阪天満宮御文庫蔵「連歌宗匠家系図」に見えない人物をカッコで括った。

- (7) 前掲註(3)金子論文の他、同「連歌古注釈の研究」研究編二「聖廟千句注の四種」(昭四九・角川書店)も兼純筆とする。

- (8) 前掲註(1)金子著書一二七〜一二八頁。伝存自体は、前掲註(1)上野白浜子・林毅編著書二点に報告されている。

- (9) 金子金治郎「連歌師宗祇の実像」(平一一・角川叢書)一四三頁。

- (10) 金子金治郎「金子金治郎連歌考義Ⅰ 心敬の生活と作品」(昭五七・桜楓社)一三〇頁等。

- (11) 重松裕巳「宗祇時代連歌」(翻刻)「連歌俳諧研究」第八〇号、平三・三に翻刻が備わる。「発句」「雪の影ぬれずは花のあらしかな」「会衆」心敬・宗悦・幾弘・満助・広幡・覚阿・宗助・祖温・修茂・景然・信広。なお、同論文等に指摘があるとおり、「弘文荘賣買書目録」第七号(昭一七・弘文荘)に写真版が掲載されていたが、所在不明であった。

- (12) 島津忠夫「心敬年譜考証」(『島津忠夫著作集』第四巻 心敬と宗祇)第一章(平一五・和泉書院)所収。

- (13) 前掲註(10)金子著書一三〇〜一三三頁。これに対して木藤才藏は、「文正元年三月七日、広幡が自分の句集に折から関東に下向していた行助の加點を受けており、また、別の句集には後になって宗祇や兼載の批点であるという点にある。(中略)各証の有る説がある説ではなく、関東に下向中の心敬に合點を求めた作家は、宗祇や兼載をはじめ多くいたことと思われるから、広幡の場合も、その場合もないというに留まるだろう」(『連歌論集』(三) 中世の文学』(昭六〇・三弥生書店)「解説」二二〜二三頁)とする。

- (14) 当該歌の詞書「かくてとし月へて」は、他撰家集としてはやや不自然な表現である。撰集の原資料が、例えば心敬の「君いなば」詠の詠草で、それに広

幡自身が書き加えた状態であったのではないか。

- (15) 本文は流布本の『源語秘訣』に比してかなり省略されており、前掲「此外二義理ナド二心得大事の事アレドモ」に込められた意図をさらに考究する必要がある。

- (16) 伊井春樹編「光源氏歌抄出 伝猪苗代兼載筆本」(愛媛大学古典叢刊7、昭四七)「解説」(後に同「源氏物語注釈史の研究 室町前期」(昭五五・桜楓社)に再録)に詳しい。

- (17) 佐藤孝徳「岩城盛隆の生涯」(『潮流』いわき地域学会)第一一報、昭六一・一一の指摘に依る。

- (18) 前掲註(1)金子著書一二七〜一二八頁。天理本『広幡句集』第三巻に一致する。

- (19) 「歌論歌学集成 第十二巻」(校注・解題、安達敬子執筆)等所収は、師兼載から兼純への晩年の聞書であり、同じ相承経路の永正五年(一一五〇)から六、七年の「古今集」聞書の内容を示す、ノートルダム清心女子大学正宗文庫蔵「古今私秘聞」(「ノートルダム清心女子大学古典叢書 第一期五」所収(赤羽淑執筆)「正宗文庫蔵」古今私秘聞「解題」を付す。(昭四五・ノートルダム清心女子大学国文学研究室古典叢書刊行会)も有名である。

- (20) 天理大学付属天理図書館綿屋文庫等蔵。「発句」「掃雁おもへば花にいは木かな」「会衆」宗碩・兼純・宗長・通能・元教・玄清・政真・周桂・底安・等運・宗牧・孝文・宗裕。

- (21) 前掲註(2)金子論文。なお、同論文は統群書類従本に基づくが、本稿では、祐徳稲荷神社寄託中川文庫蔵本を底本とする「私家集大成Ⅳ」(昭五一・明治書院)の「為広Ⅲ」(解題・田中新一執筆)に拠った。

- (22) 天理大学付属天理図書館綿屋文庫蔵。「発句」「待こしや花に紅葉にけさの雪聴雪(実隆)」。「会衆」聴雪(実隆)・宗長・玄清・宗哲・宗碩・宗仲・兼純・等運・底阿・宗牧。

- (23) 伊井春樹「長珊聞書」(源氏物語抄)について(金子金治郎博士古希記念論集編集委員会編「連歌と中世文芸」(昭五二・角川書店)、後に同「源氏物語注史の研究 室町前期」(昭五五・桜楓社)に再録)。

- (24) 前掲註(2)井上著書。

- (25) 長珊は、前掲註(1)掲出の「米沢家文書」巻十六「衆臣系譜」中の「長珊」項に「居岩城自叔父兼純連歌伝」と記される。前掲註(1)金子著書一三三〜一三五頁参照。

(国立歴史民俗博物館非常勤研究員)
二〇〇五年三月二五日受理、二〇〇五年七月二五日審査終了

A Study of the Kodoshu : In Search of the Origins of the Inawashiro Family

SAKAI Shigeyuki

A reprinting of the Kodoshu in its entirety by the author has recently been made available to the public. The Kodoshu was formerly in the *Tanaka Yutaka* collection but is now held by the National Museum of Japanese History. Its value as a source material is twofold. First, it clarifies biographical facts on Kodo's later years, which had previously been unclear. Second, it also brings new information to light concerning the mutual personal networks and relationships between Kodo and Kensai, Shinkei, *Kenten*, *Yorin Kenzai*, Iwaki Yoshitaka and *Kenjun*, who are described in the Kodoshu.

This paper first describes some of the political and religious trends that occurred in the regional society where Kodo lived by verifying these six figures using interpretations of the poems in the Kodoshu against historical materials that had been formerly available. It concludes that Kodo had come from Zenchoji Temple and was an aesthete from Iwaki who led a secluded life. With regard to the section on Kenjun, he based himself in Iwaki but journeyed back and forth between Iwaki and Kyoto while studying under the foremost authority in the field, and received assistance from provincial lords and feudal lords from the area including the Iwaki clan. This paper indicates those aspects of his behavior differed from that of Socho and *Soboku* from the same period. The paper also suggests that Kenjun's knowledge was passed on to Chosan.

It has been said that one of the features of the Kodoshu is the abundance of poems such as "doka" (religious poems), "aishoka" (poems mourning a person's death) and "tsuizenka" (poems in memory of a person). This phenomenon was occasioned by the death of Kodo's mother, which is so described in the Kodoshu itself. In his final years Kodo had no choice but to return to being a Zen monk.

The origin of the Inawashiro family of renga poets goes back to Kodo and the activities of that world of waka and renga are as portrayed in the Kodoshu. However, Kensai was instructed in the Kokinshu by Gyo-e and was, therefore, qualified to teach Kenjun about the Kokinshu. But because nobody had taught Kodo about the Kokinshu he was not able to teach Kenjun about it and so could not have been the founder of the Inawashiro family of waka poets. Kodo's name is not found among those who passed on the teachings of the Kokinshu to disciples and his name had disappeared from the genealogy of the Inawashiro family. The finding of this paper is that Kenjun took over from Kodo and it was he who passed on the ways of a renga poet to Chosan.
